

異国の丘

香川県 門口 至 一

大正十四（一九二五）年六月十四日、小豆郡土庄町本町に生まれる。昭和十三（一九三八）年三月、第一土庄尋常高等小学校卒業、昭和十八年十二月、香川県立土庄商業学校卒業。

翌昭和十九年一月に満州国政府交通部に就職のため茨城県友部高等訓練所へ入所、一カ月の研修を終え、二月上旬に満州国へ渡り、同交通部の分所である交通部国防道路建設所に配属される。

同年四月、徴兵検査を受けて乙種合格となり、昭和二十年五月、関東軍牡丹江省綏南第八四八部隊に入隊する。

昭和二十年八月七日、穆稜の陣地にてソ連軍と交戦する。同日午後、戦況不利にて同地を撤退、八月三十一日にソ連軍に対し軍使を以って交渉の結果、終戦を知り帰国手続きのため、ソ連軍の誘

導に従い、結果として捕虜となる。

直後体調をくずし、掖河陸軍病院に入院する。

昭和二十一年三月、病弱者労働隊として、シベリアに移送され、セミパラチエンクス、ウズベック共和国首都タシケント等で強制労働に服す。

三年三カ月の抑留生活の幕を閉じ、昭和二十三年十一月上旬にナオトカ港より引揚船「恵山丸」にて、舞鶴港に上陸帰国する。

復員後、家業の海運業の関連事業として、運輸省が許可する運送事業免許を取得し、昭和三十三年三月に合資会社「門口運送店」を土庄町に設立し、代表社員となる。

昭和四十九年六月、小豆島ライオンズクラブに入会し、平成三（一九九一）年七月第二十八代会長に就任、平成四年六月三十日をもって退任する。

渡 満

昭和十八年十二月、私は土庄商業学校を十八歳で繰上げ卒業し、満州国政府交通部に就職することになった。交通部というのは日本の運輸省と同

じ機関である。

当時は大東亜戦争の真ただ中で、日本国内では戦時体制下にあり、もちろん食糧難で生活が苦しい時代であった。当時の若者たちは満二十歳になれば必ず兵隊に行つて戦死する…という考え方を誰もが腹の中で思っていた。「どうせ死ぬなら物資の豊富な満州へ行つて死ぬまでの間少しでもうまいものを食べて死んだ方がましだ」…という考えで満州での就職を決意した。

昭和十九年一月、耐寒訓練と渡満準備のため茨城県の友部高等訓練所へ入所、全国各県から約百五十人からなる中等学校卒業生の集りで、すぐ隣村にはあの有名な内原訓練所がある。この内原訓練所と友部高等訓練所の所長は加藤莞爾陸軍少将で、ここでバッチリ軍隊生活同様の生活と寒さに対する訓練を受けることになった。

朝六時起床、十五分後に舎前へ整列、宮城遙拝そして全員で「天晴れ！あなかしこ…あなさやけ…あなおもしろ…一二三四五六七八九十百々地

万」等と大声で唱え、ねぼけ顔で整列していてもカーツと身体中の血が湧いてくる。

それが終わると「右向け右ッ！ 駈け足前へッ進めッ…」約三十分は毎朝村道を走らされ汗だくで帰ってくる。それから朝食となるが、ここでの訓練は主として開墾作業や軍務教練であった。茨城県辺りの緯度は新京（長春）辺りとよく似ており、一月ともなるとかなり寒い。朝早く駈足をすると立っている霜柱がザクザクと鳴り靴が二、三センチめり込む。靴跡には黒い土が見えその縁は丁度細い水晶の固まりの様に霜柱が光って見えた。未成年者であるので煙草を吸うことは許されるはずがないが、人目を忍んで朝食後の一服のうまさは格別であった。仲間同志で「お前バットか、俺はサクラじゃ」「二人で半分ずつ吸わんか」と便所の中へ入り、マッチで火を付け合つて「うまいな」とふかした。煙を手でかき消しながら心地よく吸つたものです。

便所の上の窓から煙が立ち上がっているのを六

十メートルほど離れている指導官に見つかり、引
っ張り出されこっぴどくしぼられたことがあった。

一カ月の訓練を終えていよいよ満州へ出発する
日がやって来た。東京駅を夜行列車で出発、大阪
辺りで夜が明けた。関西地区出身者の親御さんた
ちがしばしの別れを惜しみ、列車に同乗しておは
ぎや寿司などご馳走を息子に食わせる。そして友
達にも振舞ってくれ、自分としても何だか胸が熱
くなる思いであった。

岡山駅では私の兄が打ち合わせ通り乗り込み、
私のためにあつらえていたオーバークートが渡満
までに間に合ったと持参してくれた。そして祖母
が作ってくれた弁当を頬張っていると、兄貴がマ
ホービンの蓋に入れたお茶を「ちよつと熱いけど、
飲むか」と差し出され何気なく一口飲むとなんと
酒、「熱爛だ。オー酒だ」ということで周囲の連
中にも振舞ったので車内はいつとき湧き上った。
今にして思えばこの味が私と酒との深い関わりに
なったのである。

大勢の親御さんたちがいろんなご馳走を持ち込
んで来たが酒を持って来たのは私の兄貴だけだっ
た。嬉しかった、俺のことをもうそんな風に見て
いてくれていたんだなあと思うと胸にジーンとく
るものを覚えた。

列車は夕刻下関に到着、早速、関釜連絡船に乗
り込む。私は高松一中出の五人組みと仲良くなり
船内で輪になった。しばらくすると仲間の一人大
島が父らしき人とやってきて「東京からここまで
皆に大変ご馳走になったが、今度は俺の番だ。さ
あ食いねえ！」と見るとボタモチが蓋二枚にギッ
シリ詰っている。仲間たちは一斉にボタモチに飛
びつき腹いっぱい頂戴した。大島は鼻高々に「オ
ヤジはこの連絡船の船長をしとるんよ」と話し、
後で船内や船長室を案内してくれた。

翌朝は釜山、京城（ソウル）、鴨緑江を通過して
奉天（瀋陽）、新京（長春）に向うが汽車は行け
ども行けども田んぼと大平原、鉄道沿線にはたく
さんのカラスが飛びまわっている。良くみると日

本にいるカラスとはちょっと違う頭の部分だけが白く、他の部分は真黒。「お国が変わればカラスも変わるか…」ふと日本を遠く離れて行くのを感じた。

待望の満州国の首都新京駅に到着、駅前広場に整列しながら満州の大地を踏みしめて見る。駅前の大道路は三十メートル以上もあるのか「大陸だなあ」と周囲を見回すと、その大道路の向うから憲兵の機動隊がサイドカーを護衛して矢のごとく我々の前へ来て止まった。

客席に乗っていた上級将校、肩に光る階級章はベタ金、よく見ると泣く子もだまる憲兵少佐、この人が指揮官になにごとか話してこちらへツカツカとやって来るではないか。我々は「オーツ」と緊張した。でもその緊張も一瞬であった。私の隣に立っていた大島に「ヤア久しぶり」と声を掛け、そして立ち去って行った。この憲兵少佐は大島の兄さんだった。

異国での出会い

翌日、我々満州国官吏の一隊は、各官庁にそれぞれ配属され分散した。我ら二十人は交通部に配属された。高松一中から来た大島、織田とも一緒だ。その日は歓迎会で鹿鳴春という飯店で生れて初めての中華に舌つづみを打ち、私と織田は分所の交通部国防道路建設所に勤務する事になった。

この国防道路建設所の使命は、満州国の北はハルピンから南は遼東半島の大連まで距離およそ千キロにわたり、幅約二十五メートルの満州国を真半分にする一直線の大縦断道路で、飛行機がどこからでも離着陸出来る飛行場兼道路を建設するのが目的であると聞かされ我々は使命の重大さを感じた。

日曜日がくるとよく大島から「兄貴の所へ遊びに行こう」と誘われた。例の憲兵少佐宅だ。少佐殿は三十五歳ぐらい、新婚家庭で奥さんは当時満映スターの李香蘭そっくりの美人（二十六歳）であった。夕方までお邪魔して、よく晩飯をご馳走になって帰ったものだ。

ある日曜日、例によって大島と二人で少佐殿宅を訪ねた。すると少佐殿夫妻はちょうど出掛けるところで「今から俺たちは会に出掛けるところだが、でも家族会だから君たち良かつたら一緒に来ないか」と誘われた。大島は「おいどうする？」と私に相談されたがおそろのお供する事になった。

飯店に着くと少佐殿から「弟と友人の関口君」と紹介され、交通部委任官試補という肩書の名刺を差し出し挨拶した。皆さん憲兵将校のご夫婦の家族ばかり七、八組だった。

国防道路建設所は満人街の真ただ中に在り、すぐ前の道端には満人の少輩がタバコを三、四個持って「タバコ、タバコ」と通行人にヤミタバコを売っている。配給で四十五銭ぐらいを四円五十銭である。そのさえずりを聞きながら往来から横道に入ると、そこは飲食街で、ちよつとうす気味悪い地域だ。狭い路地で軒先にはブタの爪の付いた足首の薫製を幾つもぶら下げ、大鍋にはぶつ切

りにした内臓の黄色い部分をグツグツ煮ている。その隣はチェンピン（メリケン粉ウリヤントウモロコシ等の粉を水で溶いて鉄板でせんべいの様うすく焼いたもの）を売ったり、甲高い漫才らしき声にドット笑声がする喫茶店らしい店。

さらに横へ入ると、塀の陰には人糞があつたり、通行人の大半はヒマワリや西瓜の種を噛んでは口からパイパイ吐き、また歩きながら手鼻をチンと平気でやる。とにかく汚い城内に潜入した私には、目を見張ることばかりの初体験だった。

国防道路建設所では私は岩並属官や山根属官に大変可愛いがられ、勤め帰りにはよく誘われて官舎での家庭料理を御馳走になった。

ある日、岩並属官宅で「今日はおあちゃんが、先日から内地へ帰っているので食事が済んでも泊って行けばいいよ」と言われ、スキヤキを御馳走になっている時、突然玄関の方から隣人が現れ、私を見て「若いお客さんじゃないですか、お二人とも来てうちでやりませんか、さあさあ」という

ので話はすぐまとまった。

名前は笠井さんという人だ。一杯飲みながら話をしていてなまりが関西弁なので「お国はどちらですか」と尋ねると香川で、同じ小豆島の土庄とお互いに田舎の近所であったことに驚き、その夜は遅くまで近況等を語り合った。大きな白紙にここが天神さん、ここがコン池、そしてここが寺の裏道でミナシゴで保土喜崎等と、見る見る内に土庄の町の図面が出来上がる。

翌朝私は三階の窓よりこの官舎の玄関口から日本刀を腰に吊った立派な陸軍少佐が、御者が挽いた軍馬にまたがり軍事部へ登庁しているのを拝見したがまさしく笠井盛明さんで、私はそーっと見送った。

入隊 軍隊勤務

昭和十九年の春に徴兵検査を受け、第三乙種合格となり、翌二十年五月、ソ満国境牡丹江の近くの綏南の第八四八部隊機関銃中隊歩兵班に入隊し連日猛訓練を受ける。

入隊して四、五日たったであろうか、夕食後の自習時間に突然、隣の内務班で班長の全員ビンタが始まった。何やら大声でどなりつけ片っ端からパンパンと殴る音が聞える。それを聞いた我々の班でも班長が忘れていたかのように「ヨーシ、うちでも一度やっておこう。全員食台の前に並べ！ 軍隊の上靴ビンタというのを味あわせてやる！

一人ずつ俺の前に来い、足を開き歯を食いしばれ！」有無を言わせず一人ずつポーンポーンと始まった。叩かれた頬はしびれ、反対の頬はポカポカホテリ、翌朝、兵隊たちの顔の半分は紫色には腫れ上がっている。とんだ隣り班からの巻き添えである。

この上靴ビンタは、軍隊の編上靴の上部を切り取ってスリッパ状にしたもので、踵には鉄のビョウが五、六列に打ち込んでいて廊下を歩くとカタンカタンといかにも堅そうな音がする上履きである。このような痛い目に逢ったこともあったが、また、楽しくもあり、スカッターとした心地よさを

感じたこともあった。

私は土庄商業学校時代に学校で馬を飼育した経験がある。それは若者は必ず軍隊に入ったら馬で大変悩む者がいるはずということで馬を飼い馴らすことを覚えさせられた。

昭和二十年七月末日、私は入隊して演習中に両足の脛を負傷し、部隊の移動にも参加できず、残部整理班として一個中隊に十人の割で残された。作業は日に三、四時間ほどしたら後は用事がなくぶらぶらしていた毎日だ。

ある時中隊長の馬当番上等兵がギコチない動作で馬を引いて来るではないか。私はとっさに「上等兵殿、馬の運動ですか」と聞くと、馬は苦手だということで「自分が運動させてあげましょう」と手綱を受け取る。「大丈夫か、お前」といわれたが「馬は走らなきゃ糞もしませんよ」とヒラリとまたがり、練兵場の一番おくまで五、六百メートルあるうか、駆足で走る。今度は向きを変えて上等兵が待つ方向に驀進まげしんさせた。あの競馬のラスト

の追い込みのごとく、久しぶりに胸がスーッとした。

上等兵は帰った隊長の愛馬を急いで既に連れて帰った。初年兵で中隊長の馬に乗って練兵場を走り回ったのは私ぐらいじゃないかと思い、土庄商業学校の中塚校長、川井先生たちの先を見越して乗馬を厳しく仕込まれたことを感謝した。

残部整理要員として部隊に残ってから約一カ月後の七月末、八月一日付を以って約十人が中隊の移動先である穆稜地区の陣地構築現場へ追及命令が下った。一日一回部隊の炊事へ来る定期トラックに便乗して綏陽というソ満国境に一番近い町に着く。その夜は旅館で一泊、入浴後お膳の前に座った。引率責任者、前川上等兵より一人銚子一本ずつという許可が出て私には生れて初めてのお客気分を味わった。

翌朝、綏陽から穆稜駅に到着、それから徒歩で山路を歩くこと約一時間、やっと目的地に着く。驚いた、何と天幕生活である。でも先に来ている

部隊の将兵は全員完全武装である。我々は歩兵砲班だから砲を一応兵隊の力で引っ張って行くが、谷や川その他、車輪が回らない場所では分解搬送せねばならない。砲身、脚、車輪等はずして、それぞれ二百メートルほどを担いで走り、また交替するという具合である。

引率者の上等兵から二日間の野営の強行軍によってここまで皆頑張って来たことを聞かされ、自分たちは大変楽にトラックに乗り、汽車に乗り、また綏陽では宿で客扱いを受けたことを思い浮かべ、脛の傷のおかげでつらい苦しい思いをしなくて良かったと一人ひとりに微笑んだ。

ソ連参戦

幕舎生活しながらの日課は主として対戦車攻撃で、破行爆雷を敵の戦車のキャタビラの下に投げ込んで、自分は蛸壺の中に逃げ込む訓練と、戦車壕、いわば戦車の落とし穴掘りで、戦車が通って来そうな箇所へいくつも穴を掘り続けた。もちろん全作業はスコップとツルハシで大変な重労働であ

る。大きな石が多く、スコップ、ツルハシが立たないので一日に一内務班で一個掘るのが精いっぱいである。

昭和二十年八月初めごろのソ満国境守備での関東軍の様子はこのような状況であった。

そして八月七日未明、幕舎内に眠る兵士たちは連日の壕掘り作業で疲れきって、ぐっすり寝込んでいた時ドドドーンという大きな爆発音と共に地響きによってたたき起こされた。ソ連軍の日本軍に対する不意の宣戦布告であった。幕舎内で就寝中の兵隊たちは飛び起きて「何だあの音は」と真夜中の爆発音に騒いだが中隊から何の連絡もなのまま連日の疲れで再び寝入り込んだ。

翌朝、起床と同時に武器弾薬の手入れだ。やはりソ連が攻撃して来たらしい。とうとう戦争だ。武器の手入れが終わると全員対戦車壕掘りや歩兵砲を遮蔽するための壕掘り作業、さらに我々の入る一人用壕の蛸壺作りである。

ソ連軍と交戦したのが昭和二十年八月十五日未

明だから、それまでの八月七日よりの一週間は、朝六時から日の暮れるまで毎日壕掘り作業が続けられた。そしてこれでやっと戦闘準備が出来た、いよいよ明日あたり敵と闘うか、二十歳の若桜もソ連と戦い北満の地で死ななければならぬ時が来たか：何か寂しいようなめめしいような、気持ちがこみあげ、「日本男子として情け無いぞ」と自分自身に鞭打った。

軍用トラックが二、三台、将校や軍属の家族を乗せて後方へと砂煙を上げて去って行く。黄色い声でハンカチやタオルを振りながら「兵隊さん！ お願ひしまーす」次のトラックもまた同じように声をそろえて「兵隊さん！ お願ひしまーす」と。女はいいなあ男は損だなあとそんな気持ち持がした。

夕食後班長が「皆良く頑張った。これで大体戦闘準備が出来た。今日は早く寝て明日はいよいよ敵と遭遇するだろう。ゆっくり休め」。我々はほっとしたとたん「門口！お前は後方警備の歩哨の

一番立ちをやってくれ」と命令され「えっ」と思ったが、まあ二時間交替だから途中立ちより一番の方が任務が済めば後は朝まで続けて寝られるとあきらめて任務についた。

実戦だから着剣して実弾を込めての立哨である。ちようど八月十四日の夜中から十五日の朝の三時ごろまで雨に降られてつらい歩哨だった。とうとう朝まで交代は来ない。来ないからといって任務中に後方へ行つて交代を求めすることもできない。実戦だからいつ敵が攻めて来るかも分からない状態だから朝まで歩哨を続けた。

「門口、御苦労！」疲れているだろうが、お前は歩兵砲の連絡兵に立ってくれといわれた。その任務は砲弾の着弾地点や距離等を観測して大砲までそれを知らせる連絡兵である。そして自分の持場の哨壺に入つて間もなく敵が近づいて来た様子だった。友軍の機関銃もすぐそばで激しく撃ち始めた。もう敵は四、五メートル先まで来ているようだ。

私が入っている蝸壺のすぐ横では同年兵の機関銃が必死で撃ちまくっている。しゃがんで外の様子をジーツと伺う。ピュンピュンと頭上に音、ハット見上げた瞬間黒点が見えた。無意識にうずくまり、目と耳を両手で押さえ息をこらす。

ドカーン……二、三メートル先に落下、バラバラッと砂塵をかぶる。「ヤラレター!」「しっかりしろ!」の声、機関銃兵が負傷したらしい。「衛生兵!」と叫びながら、本陣方向へ連れて行く様子……。数分後、敵銃弾も少なくなり、時々流れ弾の音がするくらいで、先の激戦はどこへやら。私は何だか雲の中の別世界にいるようであった。

どのくらい時間が経過したか、遠くで「門口! 門口!」と呼ぶ。私は「オーイ!」と穴から首を出すと同年兵の植木が呼びに来ていた。「お前これで二回探しに来たんだ。もう戦死でもしたのかと思っただぞ、皆集まっているついて来い」という寝込んでいたとはいえず「俺はずーっとここにいたぞ、お前はよそを捜しとったんと違うんか」と

いい返してとぼけた。

一週間も続いた壕掘り、そして昨夜は一睡もしないでの不寝番でふと寝込んでしまったのだ。もし植木二等兵が二回目に捜しに来ず中隊が移動したら、私はこの戦場の中で一人ではぐれ兵士となつたことだろう：運が良かったと心では思った。

歩兵砲の側に中隊長以下全員が集っていて、そこで初めて敵の戦車を見る。我が中隊の勇敢な兵士が擱座かくざさせたとみえる。中からロスケを引きずり出して取調べている。初めて見る敵兵の目と髪の色が我々とは違う。どうも所持品から見て少尉ということだ。

折しも戦車二、三台と思われるキャタピラの音がしてこちらへ向って来るようだ。「我が中隊は、後方の山の中に一応身を隠す。前進、早くしろ」そして見習士官は多田上等兵に、戦車から引きずり出した少尉たちを「処置して来い」と命じ、我々は山の方へ急いだ。

三百メートルほど行くと通信隊の仮小屋があり、

その前には我が軍の物資、タバコ、乾パン、ゼンザイなどがバケツにいっぱい入ったまま三個も放置され誰もいない。我々一行は小休止をとった。誰もタバコ、乾パン等をポケットにねじ込みゼンザイは熱くて手がつけれられない。ある者は飯盒の蓋ですくつて食べる。自分も欲しいがすくう物がない。

「何をやっているか、早く行かんか」いつの間にか小休止は済んで皆歩き出している。そして二百メートルほど砂地を上り下りしてトウモロコシ畑を過ぎ山にさしかかった時、見習士官が多田上等兵に「望遠鏡を先ほど小休止をした通信隊の小屋へ置き忘れて来た。初年兵一人を連れて取って来い」といい。上等兵はすぐそばにいた私を見て「門口！来い」というので同行した。

山を降り、トウモロコシ畑を通り抜け、砂丘を登り始めた。二百メートルほどで通信隊の小屋がある。ゼンザイ、タバコ、その他もある。せめてゼンザイ一口でもと思いいながら二人で歩いている

と急に戦車のキヤタビラの音が聞えた。しかも近い。これはいかん砂丘なので遮蔽する場所もない。「門口、トウモロコシ畑まで一応さがれ」と引き返した。砂丘の上を見つめているとキヤタビラの音が近づいてくると同時に、砂丘の頂上線に戦車が巨砲を突き出しこちらを睨んだ。息をこらして戦車の行動をうかがう。その時後方の山向うから我が軍の重砲らしき大砲の発射音が聞こえ、数秒後、目の前の敵戦車の直前で炸裂、戦車は砂丘の向うへ走り去った。

私たちは胸をなでおろしたが、その時の様子はちょうどニュース映画を見るがごとき光景だった。中隊が待っている山中に帰り任務の果たせなかつた事の報告をすませた。

撤退

中隊は、一路牡丹江へ後退し、再び武器弾薬、態勢を整えて反撃に乗じる方針だ。という事で食糧として取り敢えず二包みずつの乾パンを受け取った。牡丹江までの道はかなり遠い、しかも主な

道路はもうソ連の戦車や装甲車等それに伴う敵兵がかなり進入して来ているので、我々中隊は道路添いの山伝いに行軍が始まった。

一日目山中から見下す道路にはソ連軍の自動車が走っている。うっかり道を横切るのは中隊行動では難しい。二日目にはもう乾パンは食いつくし、空腹を口々にもらし始めた。三日、四日、そして一週間、もちろん毎日毛布は二人で一枚の野宿である。今夜はここで野営と定まれば、夜露がしるげる木の下を探し背中合わせでもぐり込む。毛布を持っていない兵士もいるが、八月といえども朝夕は冷え込む。夜が明けるとまた歩く。

「どこまで続くぬかるみぞ、三日二夜食もなく、雨降りしぶく鉄兜」そんな歌の文句が、行軍しながらも頭の中に浮かんで来る。心身ともに疲れ果てたこんなとき、誰がこんな歌を作ったのか、なるほど「行けど進めど道なき道を……」山の中を一列になって人類未踏の地を進む。

前の兵隊が木の枝を手でおさえて通り過ぎると、

その枝が無意識に行進している後続の兵士の顔面にピシヤリツとはねかえり、ハッと我に帰る。

次の部落を見付けてよく見るとここにも赤旗が立っている。行く先々の部落には必ずソ連軍が入り込んで赤旗を立てて駐屯している。これでは食糧を求めに部落入りは出来ず、仕方なく次の部落へ向けて行進する。

二日ほどたつてやっと部落を発見、よく見ると先日来た部落だ。「おかしい」の繰り返しだ。良く考えて見るとどうも我が中隊は方角がつかめず、山頂をぐるぐる同じ所を回っていたようだ。これでは何日歩いても牡丹江へ行ける訳がない。

あの八月十五日の大激戦以来、我々は山の中を歩き回って来たが、その間、日本軍とソ連軍が打ち合いをしていた様子は全然覚えがない。おかしいというので中隊長以下十五人が軍使としてかなたの赤旗が立てられている部落のソ連軍へ話し合いに向く事になった。中隊長以下十五人は八月三十日朝、ソ連軍に話し合いに行く。しかし話が

決裂したら昼の十二時を期して最後の突撃をせよ。我々も話がだめな場合、「十二時まで話を何とか引き延ばして十二時を期してなぐり込みをかけるから」ということで我々中隊は遂に死ぬ時が来たと決心して突撃準備に覚悟した。

「手榴弾を敵に投げつけ自分も一発抱えて自爆するんだぞと」上等兵に指導を受けながら赤旗の立つ部落をジーツとうかがう。

終戦捕虜

しかし今日（昭和二十年八月三十一日）の正午までに軍使として出向いていた十五人が帰って来なかったら正午を期してかねてより打ち合わせ通り突撃を敢行しなきゃならん、二十歳の若桜この北満の地で花と散るか、とそんな思いで固唾（かたず）を飲んでいるとはるか部落の方から軍使がそろって帰って来るではないか。我々はほっとして胸をなでおろした。

「最後の突撃、殺し合いなんかせずに済んだぞ！」皆口々に語り合い久しぶりでほころんだ顔

を見せた。

戦争は終わった。停戦協定を結んだのだ。「日本軍はほとんど東京ヘダモイ（帰国）している。明日にも皆さん出て来て帰国の手続きをしなさい。食事の準備も致します」ということである。

そういえばこのところ、八月十五日の激戦以来、鉄砲の音は全然聞いた覚えがない、おかしいと思っていた。皆汽車に乗って帰つとるんかというところで、中隊長以下全員が翌朝出向いて行った。九月一日であった。

手榴弾はここへ、機関銃、小銃はここという具合にそれぞれまとめて置かされ、さらに身体検査をされて四列に並んで前に進む。「イジーイ（行け）」の声に振り返ると、ロスケは自動小銃（八十一連発）を向けてついて来るじゃないか。「あれっ…」我々はその時もう捕虜になっていたのである。

「だまされた！ 残念だ」とつぶやきながらの行軍が続いた。小便がしたくても列からはずれよ

うとすると発砲され、あわてて引き返す。言葉が通じない。催促すると「もう少し先へ行つた所で用意してある」との繰り返しである。

考えて見ると昨日に今日の話で、野戦で急に捕虜何百人の飯の用意等はそんなに早く出来る訳がない。

山の中を歩くよりは楽だったが、捕虜となつて歩かされるのは言葉ではない表わせない精神的苦痛である。歩いていると道端にトウモロコシ畑がある。腹が減っているから一人が飛びついて千切る、パタパタと二、三人が隊列からはずれる。自動小銃が威嚇する。そんな行軍が続いた。

捕虜になつて三日目、やっと掖河という街に到着。掖河は牡丹江の隣の街で、丘の上には関東軍の部隊あり、広い道路を挟んで白い洋風のお城のようにそびえる関東軍の陸軍病院が見えた。

我々はやっと部隊に落ち着いたが、先着の多勢の日本軍がおり、何組もの捕虜たちがロスケに監視されながら部隊から出て行つたり、また帰つて

来たり、時には何百人も隊を組んで行き来する光景も見受けられた。

我々も翌日、作業に連れ出されたが、それはソ連軍が関東軍の物資を自国へ持ち込むための駅での貨車積みの作業であつた。

満載にして出発、また空の貨車が入る。また物資を積み込んで送り出す。日本兵捕虜も五、六百人ずつ乗せてソ連領内へピストン輸送を始めていた。それでもロスケの「東京ダモイ」の言葉にだまされた気持の半分は、日本へ帰れる順番が早く来ないかなあと思うのであつた。

入院生活

三日ほどたつた。心身の疲労と食ひ馴れない毎食の高梁めしで、私はついにひどい下痢を起し、診察の結果赤痢と診断され、直ちに隣の陸軍病院に入院せよという。「カルテを持って病院まで一人で行きなさい。途中ロスケの監視兵が声を掛けて来たらこう答えなさい」と通訳から返答するロシア語を教わつた。

病院近くまで行くと望楼の上から自動小銃を構えたロスケの監視兵が「クダーイジョー（どこへ行くか）」と、私は教えられた通り「フーゴスピタル（病院へ行きます）」という「イジイー」という具合で無事通過入院できた。

入院したのは内科病棟で、その夜から三九度以上の熱が出て、粥食よりも物凄く水が飲みたくて、ふらふらしながら水筒をさげて夢うつつで、入浴用のドラム缶の水をくみに行ったことを思い出す。その時の水のうまさは最高で、生涯忘れ得ぬ味であった。

熱が下がった後に内科へ入れられたが、手違いということで再び伝染病棟へ移された。そして大部屋に入室する。回りを見るとほとんどの兵が血便のタレ流しで、アンペラを敷いた上に横になり、やせこけた戦友が寝ている。でも私は、内科での高熱がどうした訳か、二日目まで下って、下痢も固い便と変わり食欲も旺盛となる。赤痢などどこへやら、同室の戦友たちの世話が出来るほど元気に

なっていた。

この病院は戦勝国のロスケの女軍医ドクトルと、シストラーと言って看護婦が大勢来て病人を世話している。毎朝十時ごろ、マダムドクトルがシストラーを伴って診察に来る。「アナタ、ペスジョ、ナナカイイキマスカ」の問いに、回数を手でポンポンと叩き、片手を開いて前へ突き出す仕草をすると（二十五回）「オームノーガ（多い）」と唇をとがらせて首を横に軽く振り「スパーナスパーナ（寝てなさい）」といわれゴロリと横になる。これは重傷者はもちろんだが大分良くなっている戦友も同じ仕草をしてこの病院に何日までいようとする気持が良くわかる。

掖河陸軍病院に入院し、赤痢だと思われたのが僅か五、六日で治って、元気よく病室内の手伝い出来るようになり、時々使役にも引っ張り出された。

いろいろな使役の中でも一番私の心に残っているのは死体の運搬作業であった。毎日数人の死者

が出る中で、本人の所持品の中からシャツやフンドシ等新しいものに着せ替えて霊安室へ運ぶ。翌日また死者を運ぶ。昨日の死者の屍の上にゴロリと寝かす。三、四日するともう死体は二十体ぐらいになつている。

今度は埋める作業に引つ張り出され、病院の周囲に掘つてある防空壕に五体ずつ埋める作業だ。担架に屍を二人づつ載せて、五メートル間隔に掘られてある防空壕に埋めるのだが、屍が三十体以上もあるので、誠に悪いと思ひながら五体ずつ葬らせてもらった。体重の軽いのは二体ずつ担架にのせて一、二の三でゴロリと穴へ入れる。うつぶせとなつたり、片足が壕の縁に引つ掛かつて変な格好になりうまく納まらない。これでは気の毒だと思つて屍が五体横たわる壕の中へ降りて、きちんと直して寝かせてやる。中には気の毒にも同年兵の屍もあつた。

九月も終りのある日、将校たちと兵隊の服を来た少年たち四、五十人ほどであろうか、病院へや

つて来た。よく見ると軍医と看護婦と衛生兵だ。看護婦は皆髪を切り、兵士の服を着、ドタ靴をはいて丸顔、一見小学校五、六年生の男子生徒に見えるが、話し声ですぐ女だと分かる。二日後、この病院はソ連側の軍医、看護婦等と日本側の軍医、看護婦等と入れ替わつて患者を診るようになったのである。

そして十一月末ごろか、朝夕の寒さが厳しくなり、病室はストーブを焚くようになる。私たちは毎日、病院内の石炭置場へ石炭を取りに行く。そのとき心安くなった第三内科の当番兵だという篠原が伝染病院へ入院して来た。赤痢らしいということ、私は彼の装具や持ち物を持つてやり病室へ案内した。

「時々、第三内科の事務室のストーブ焚きを頼む」「前島軍医大尉殿はストーブ等は焚いたことがないので」という。翌日から軍医が病室へ来られる時間を見計らつて事務室のストーブを焚いて部屋を温めて差し上げた。大尉は大変喜び、時々

外部から仕入れて来た焼酎や豆腐をくれ、大尉とも心安くなった。

ある日、例のごとくストーブを焚いていると、

「門口、この病院もソ連から目を付けられて、健康者約三百人ほどはソ連へ引っ張って行かれるぞ。これはソ連軍の命令だから」という。ソ連とはシベリアだ、何とかして居残る方法はないものか。

「軍医殿、自分を何とかこの病院へ残して頂けませんか。軍医殿の力で…」という。「そんならお前炊事へ行け、炊事の事務室長は佐藤少尉殿だから今夜わしから話しとく、明朝わしが行けといったといえれば良い。しかしお前階級は何だ」

「二等兵です」「それはいかん糧秣係は上等兵以上でないといけない規則になっている。仕方ない上等兵だといって行け」といわれ、翌日上等兵になりすまして炊事の事務室へ参上した。

「入ります」と事務室に入り佐藤少尉に「前島大尉殿が炊事の事務室には佐藤少尉殿がおられるから行けといわれて参りました」というと、佐藤

少尉はすかさず「門口、お前は初年兵じゃのう」の一言に「ハイ」。上等兵になりました私にとって大きなショックであった。仕方なく事を話し納得してもらった。

私は初年兵のため申告の仕方を知らなかったのだが、佐藤少尉殿は糧秣倉庫の鍵を手渡してくれた。翌日から炊事軍曹が兵隊を五、六人連れて「糧秣受領に参りました」と大声で私に敬礼するではないか。戦争は終わったものの初年兵によくも糧秣倉庫係をさせてくれたものだ。前島大尉と知り合って非常に良かった、得をしたと今でも思っている。

その夜から教育隊に入り起居した。一つの兵舎で入口付近は衛生兵や我々勤務者の部屋で、一番奥が看護婦たちの部屋である。

日本女性がいるというのでたびたびロスケが酒を飲んで「マダムイエス（女性は居るか）」と女欲しさにやって来る。戦勝国の常だ。我々が入口で阻止すると、ときには発砲して暴れることも

あった。ときには阻止できず、看護婦部屋へと入り込んだ事もあった。我々はどうなる事かと思っ
ているとしばらくしてロスケは変な顔して帰って
行った。後で聞くと看護婦は天井裏へ隠れて難を
免れたようであった。

病院内にはいろいろな人がいて、学者、早大出、
慶大出などの人が作詞をし、それを早乙女光とい
う作曲家が作曲してすぐ歌にする。こんな事もい
つとき流行した。その中の一つの「土庄音
頭」の曲として私が持ち帰った曲である。

糧秣倉庫、炊事係の食事は将校食が与えられ数
日で太り体力も回復出来た。食事が余るほどある
ので、病棟を訪ね、同年兵や同県人を探して差し
上げたりした。池田町出身の中西義雄さんもその
一人であった。

このように捕虜になっても結構な毎日を送って
いたが、忘れもしない昭和二十一年三月三日、女
の節句の日、掖河陸軍病院にもソ連の目が向けら
れ、軍医藤川護一少尉以下二百五十人、衛生兵、

病院勤務者及び作業に堪えられる病氣上がりの者
たちが翌三月四日掖河駅からソ連領へ貨車輸送さ
れた。

シベリアの荒野を西へ西へと約一カ月かかって
セミパラチェンスクという駅へ着いた。こうして
以下、強制労働の三年間が続いた。

帰国

昭和二十三年九月中旬であった、引込線に貨車
が入り「ヤポニーダモイ：早くしろ、日本へ帰る
んだよ」とロスケがいうではないか。我々はいわ
れるままにいそいで貨車に乗り込み、またどこか
へ移動させられるかも知れないと思っていたが、
どうも今度は本当に帰国のような感じがした。

それから約一カ月後、三年前に通ったセミパラ
チェンスク、イルクーツク、バイカル湖、チタ、
ハバロフスクを経てナホトカへ。途中ナホトカ付近
の鉄道沿線には多くの日本兵が鉄道工事に携わっ
ていた。我々より先にこの辺りに来たのだろう。
順番だったら我々の帰国はまだまだ先のことだが、

どうもこの度は、我々の方が早く帰国船に乗船するかも知れないと、気の毒に思いながら着いた所がナホトカであった。

このナホトカに着いたのはフタロイチャースカの収容所を発つてから約一カ月後であった。「今度は本当に帰国できるかも知れない。」出航がうまく行けば十月十四日の秋祭りには間に合うかもしれないと心の中でひそかに祭りの時のいろんな場面を思い起こした。当時の若者や独身者にとって秋祭りは最高の青春のふれあいの場であったからである。

ナホトカに着いたら捕虜名簿の再確認、検疫、衣類の員数検査、入浴、着衣の煮沸滅菌等、一服する間もなく次から次へと急ピッチで進められ、全過程を三日で終了し、ソ連軍高級将校により別れの挨拶があった。

通訳によると「何年間も御苦労でした。同じ人間でありながらあなたたちは捕虜として扱われて来たが、私たちも国の命令によって動いたので、

もしこれが逆だったらあなたたちもそうしただろう。帰国したらいつか私がこんな話をした事を思い出して下さい。」と言うことで一路ナホトカ港へと行進した。

途中の浜辺には先に帰国した同胞たちが余分な持ち物を山のように捨てていつていた。中には巧妙に作って楽しく遊んだはずの麻雀牌も沢山見受けられた。「日本へ帰るんだからもう何もいらない！」という我々捕虜の心境がよく感じられる光景であった。日本海だ！この海の向うには我が祖国日本がある。同胞たちは「オーッ！」と叫んだ。目の前には「恵山丸」と船首にはつきり書かれてある。これでやっと帰れるか心の中でつぶやく。他の同胞も皆同じことを胸の中で思ったに違いない。間もなく乗船が開始されたと同時に全員が緊張し静まりかえった。というのは帰国を目前に何かの事情で列外に呼び出されたりして乗船を後回しにされたり、次回にされたりしたらもう次の帰国はいつのことか当てになるものではない。

またこのナホトカには我々より先に到着して、何らかの理由で遅延されている人たちも多勢いるからである。

ロスケは一人一人名簿を見ながら名前を読み上げ、確認して乗船させる。縄梯子を一生懸命に、そして素早く駆け登り、甲板に足が着くや否や一目散に船底へと走り込む。これは何らかの間違いで、というのは憲兵とか特務機関員、新聞記者とか、高級将校だった自分の階級をかくして不審に思われた時は乗船中止となるおそれがあるからで、もし呼び止められても聞えぬふりして逃げ込むというのである。

次々と皆船底へと走り込んで行く。乗船が完了したらしい、船のエンジンが始動して動き出した。と今度は一斉に我先にと甲板上におどり出た。

舞鶴へ上陸

我々を乗せた「恵山丸」は、一路大海原の日本海を祖国日本に向かって航海を続けた。数時間たっただろうか船内が急に激しくなった。どうも抑

留中に、ソ連より日本軍捕虜に命令や連絡があったとき、率先して彼らに協力した者に対し、今ここで逆恨みとなって、共に苦勞した同胞から隠忍の爆発が起きたのであった。彼らは船内を逃げまわったが、遂に捕まりたちまち吊し上げとなった。三年間、口では言い表せないシベリアで味わった苦勞と辛酸をなめさせられた怨みのはけ口が彼らに向けられた様だ。「ロスケにへずらつて、大きな面をして、俺たちをこき使いやがって……」と殴りつける。向うでも始まった様である。ロスケに対する恨みを彼らにぶつけたのである。

「恵山丸」は二日目の朝、舞鶴港に入港。松の木が青黒く朝霧に包まれた山々を眺めて、やっと日本へ生還できたという喜びを嘯み締めた。キャッチャーボートで何回にも分けて上陸したが、皆嬉しさが堪えきれず誰からもなく、愛国行進曲の大合唱となり、元氣よく上陸が始まった。

涙の再会

お帰りなさい お父様

お帰りなさい お兄様
鉄の帳のシベリアで

骨を凍らし身を晒し

御苦労なされた 幾年を

想えば想えば 唯泣ける

拡声器から流れる「涙の再会」の歌に、日の丸の小旗を振りながら「お帰りなさい、ご苦労様でしたー」と婦人会の方たちの出迎えに感激しつつ上陸した。

引揚援護局の大広間でしばらく休憩、久しぶりで横になって見る曇の感触。静かに目を閉じると、あの昭和二十年八月十五日のソ連軍との大激戦から今日までのいろんな出来事が走馬灯のごとく脳裏を駆け巡り、不運にも帰国できずに重労働を課せられている幾多の同胞のことが思いやられ、一日も早い帰国を祈ったのでした。一日も早い帰国を祈りました。

現役志願した一少年

山形県 阿部 正二

(旧姓 渋谷)

生い立ち、家族、郷土の環境

私は大正十二（一九二三）年三月一日早朝、西村山郡大井沢村で一農民の三男として誕生しました。入隊時の我が家は、田地一町歩、畑地一町歩を耕作して米、野菜の生産を行い、また春、夏、秋の三回、繭の生産（桑の葉は自家生産）、冬期は国有林の下刈り、枝払い、さらに木炭業を家族全員で分担して生計を立てておりました。

入隊当時の家族は、次男は昭和十六（一九四一）年、盛岡の騎兵隊に入隊して満州へ転属、長男は昭和十八年四月三日召集で山形歩兵連隊に入隊しており、それに両親、長男、弟と私の五人家族でした。

この郷土は、米、各種野菜、林檎等の果樹、さ